



令和5・6年度 戸田市教育委員会研究委嘱

戸田市立喜沢中学校

研究紀要

【研究主題】

コミュニケーション能力の育成
～協働的な学びと外部とのつながりを通して～



1 教育長あいさつ

戸田市教育委員会教育長 戸ヶ崎 勤

戸田市立喜沢中学校におかれましては、戸田市教育委員会研究委嘱を受け、研究主題を「コミュニケーション能力の育成 ～協働的な学びと外部とのつながりを通して～」と設定し、総合的な学習の時間の PBL を基軸に、生徒のコミュニケーション能力の育成についての研究に取り組まれました。このたび、その成果を紀要にまとめられましたことに、心から敬意を表します。

さて、技術革新が著しく、将来の予測が困難なこれからの時代においては、様々な価値観や背景をもつ人々との集団において、共感しながら人間関係やチームワークを形成し、正解のない課題や経験したことのない問題について、対話を通して情報共有し、自ら深く考え、伝え合い、深め合いつつ合意形成し、課題を解決する能力が求められます。本市においても、産官学と連携しながら、「戸田市 SEEP プロジェクト」をとおして、実社会や実生活で生きて働く力の育成を図っています。

そのような中、喜沢中学校では、授業の中で生徒の「コミュニケーション能力」を育成するためには「教師の効果的なファシリテーション」が不可欠であると捉え、実践研究に取り組まれました。独自に「喜沢中ファシリテーション 9 つのポイント」や「ループリック」を策定して各教科で実践したことで、生徒が課題に対し自分の考えを伝え合う機会が増え、「聞き手を意識して伝える力」や「相手の意見に耳を傾け、その意図を理解する力」などの、学び合う力の向上につながっております。本研究の成果が、御参会の皆様をとおして、さらに多くの方々に共有され、各学校等の教育活動に生かされることを期待しております。

結びに当たりまして、喜沢中学校の研究に御指導いただきました、教育ファシリテーション研究所 所長 ・ 独立行政法人教職員支援機構 フェロー 三田地 真実 様をはじめ、御指導を賜りました先生方に心から御礼申し上げます。また、益田校長先生のリーダーシップのもと、研究を推進してくださった教職員の皆様並びに関係の方々に感謝申し上げ、挨拶いたします。

2 校長あいさつ

戸田市立喜沢中学校 校長 益田 光行

本日、戸田市教育委員会研究委嘱研究発表会を開催できますことを心より感謝申し上げます。本発表会は、本校が令和5年度より新たに取り組んでまいりましたPBL研究の成果を皆様にご覧いただき、御指導、御鞭撻を賜る場として設けたものでございます。

本校では令和2年度よりPBLの研究に取り組み、令和4年に成果として授業における生徒の主体性の変化などを発表いたしました。その際に、子どもたちのコミュニケーション能力に課題があることが明らかになり、その課題解決を図るためにさらにPBLの研究に取り組もうと令和5年度より戸田市教育委員会の研究委嘱をいただき研究を進めてきました。

PBLの重要性は広く認識されていますが、変化の激しい社会において、子どもたちには自ら課題を発見し、解決していく能力が求められています。戸ヶ崎教育長の「変化する社会の動きを教室の中に取り入れた教育」という御示唆、そしてCSTIの報告書が示す社会の動向を踏まえて、あらためてそのことについて考えました。

結論のひとつとして、少子化が進む現代において、子どもたちが少ない人数で世界と渡り合える力を身につけることが重要だと考えます。そのためには、従来の知識習得だけでなく、PBLを通して未来を生き抜く力を育成することが不可欠です。本校では、子どもたちが主体的に学び、課題に挑戦する中で、達成感や喜びを感じ、未来を生きる自信をもたせることで自然と笑顔が溢れるような「日本一笑顔」の学校を目指しています。

また、PBLの実現には、教師がファシリテーターとしての役割を担うことが鍵となります。そして教師がファシリテーターになることは、PBLの成功だけでなく、小中間の学習の連続性やICTの有効活用にもつながると考えています。

結びに、御指導を引き受けていただきました、

教育ファシリテーション研究所所長、並びにNITS独立行政法人教育支援機構 三田地 真実 様
戸田市教育委員会教育政策室指導主事の皆様に心より御礼を申し上げ、挨拶いたします。

3 令和5年度の研究の歩み

(1) 主題設定の理由

令和4年度、喜沢中の職員を対象に行った研究の反省において、喜沢中学校の生徒の特徴として、次のことがあげられた。

『生徒同士の協働的な学び合いには慣れているが、逆に何でも人に聞いてしまうなど、自己決定する力や自分自身で深く考えようとする力が弱い』

また、『自分の考えを表現するための言語能力』や、『相手の話から要点をつかむ力』が乏しいことから、そのような部分に目を向けた取組をしていきたいという意見があった。

そこで、研修担当を中心に2年間の研究主題を「コミュニケーション能力の育成」とし、そのために、各教科の授業で思考力・判断力・表現力の育成や、外部機関と連携したPBLの授業づくりを行っていくことにした。

「コミュニケーション能力」といっても様々であるが、今回の喜沢中学校としては、

- ①「聞き手側を意識した伝える力」
- ②「相手の話から要点をつかむ力」の2点を向上させるための研究を行う。

この力を伸ばすことで、喜沢中学校の生徒が将来、価値観の違う相手と円滑にコミュニケーションを取り、仕事を進めることができる力を身につけてほしいと考える。本研究を通し、喜沢中生が、先の見えない不透明な社会の中で、答えのない課題に対して自分の考えを表明しながら他者と協働して取り組む力を高めていきたい。

(2) 研究仮説

総合的な学習の時間での**チームによる協働的な活動や外部機関との連携を通して**、本校生徒の課題の1つである、**コミュニケーション能力の育成が図れる**と考える。同時に、**チームによる課題解決の取組を通して、計画を実施する中で調整・修正する力、ファシリテーション能力**（話をまとめる力や仲介する力）、**先を見通す力なども育成される**と考える。

(3) 令和5年度の研究の概要

①生徒アンケートの項目検討（令和5年6月）

目的：総合的な学習の時間の活動の中での、協働的な学びや外部とのつながりを通して、研究主題であるコミュニケーション能力を含め、どのような力が身についたのかを調査するためのアンケートを思案した。

- ①人に説明したり、アドバイスする力はある。
- ②他の人と協力しあったり、意見を交換することは得意だ。
- ③報告や発表などで、他者に自分の意見をうまく伝えられる。
- （そう思う、どちらかと言えばそう思う、どちらかと言えばそう思わない、そう思わない）
- ※この質問項目は、右ページの内容に変更した

また、喜沢中学校として考えるコミュニケーション能力についても職員間で考えて、以下のように整理した。

- ・伝える力：プレゼンテーション、相手に質問できる、感想が言える、質問に答えられる。
 - ・聞く力：傾聴力、感想が言える、質問に答えられる。
 - ・非言語的能力：雰囲気や状況を感じ取り、適切な言動（表情うなずき姿勢等）をとれる。
- この3つの力があると、話し合いが続き、内容が深まると考えられる。

そこで、各教科の授業では、コミュニケーション能力を育成する場面が入るように意識して取り組むようにした。また、総合的な学習の時間では、生徒同士がコミュニケーションをとれる場面を設定したり、外部との連携が図れる機会を各学年の総合担当中心に授業を考えていくこととした。

②各学年の取組

1 学年・エナジードを使用した学習

教材を使って、「気づく力」「発案する力」「実現する力」について学んだ。

2 学期以降の活動を行う上での考え方の基礎を学んだ。

- ・CM づくり

2 学年・ライフキャリアすごろく

3 人～4 人グループに分かれてすごろくを行いながら、人生の分岐点の選択肢について自分の考えをグループのメンバー伝えた。

3 学年・Zoom を使った外部講師との連携

- ・Class room を活用した学年合同の大喜利、地図づくり等
- ・あったらいいなを形にしようプロジェクト

③生徒アンケートの実施（令和6年2月）

学年末に、各学年のPBLが終わったタイミングで生徒にアンケートをとった。1年間の授業を通して、「相手に話を伝える力」や「相手の話から要点をつかむ力」が身についたと思うかどうかについて調査した。

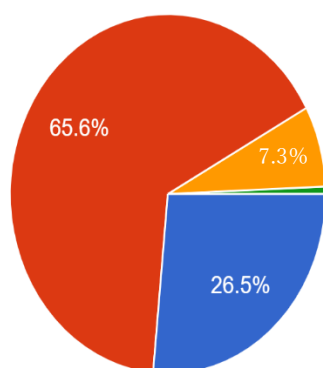
- ①「相手に話を伝える力」(A、B、C、D)
- ②「相手の話から要点をつかむ力」(A、B、C、D)
- ③自分が印象に残っている学習について触れながら具体的に書きなさい。
- ④これからの社会で生きていくために、今後身につけていきたいと思う力がありますか。
理由とともに書きなさい。

④第9回校内研修（令和6年2月14日）

アンケート結果をもとに、生徒が日々の授業を通してコミュニケーション能力が身についたかどうかについて分析した。

- ・1年間の授業を通して、①「相手に話を伝える力」や②「相手の話から要点をつかむ力」が身についたと思うかどうかについて

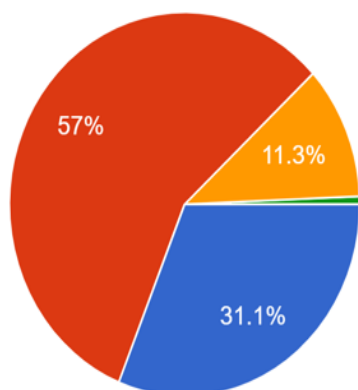
① 1年間の授業を通して「相手に話を伝える力」が身についたと思いますか？



● A
● B
● C
● D

A よく身についた
B 身についた
C あまり身につけていない
D 身につけていない

② 1年間の授業を通して「相手の話から要点をつかむ力」が身についたと思いますか？



● A
● B
● C
● D

A よく身についた
B 身についた
C あまり身につけていない
D 身につけていない

・③ ①②で回答した『身についた力』について、自分が印象に残っている学習について

- ・授業でディスカッションを行うことから、自分の考えを正確に相手に伝える力がついたと思う。
- ・国語の合意形成のときの授業で相手の話から要点をつかむ力がついたと思う。
- ・総合的な学習の時間のグループ活動・発表などを行うことで、相手に話を伝える力と要点を聞き取る力が身についた。

・④これからの社会で生きていくために、今後身につけていきたいと思う力

- ・相手の意図を読み取る力を身につけたい。これから年をとって社会に出ていく上でコミュニケーション能力や意図を読み取る力が不可欠だと思ったから。
- ・話し合いなどのときに、自分の考えや意見を素直に言う事。理由は、人と話すときに自分の意見を言えずに、相手の意見に合わせて話してしまうことが多いから。
- ・相手の話を聞いて内容を正確に理解する力。社会で生きていくのに必要だと思うから。

この生徒アンケートより、今後も継続して各教科の活動を通してコミュニケーション能力の育成を図るとともに、総合的な学習の時間を中心とした PBL での協働的な学びを実践していくことで、生徒が社会に出たときに必要な力が身についていくことと考察した。

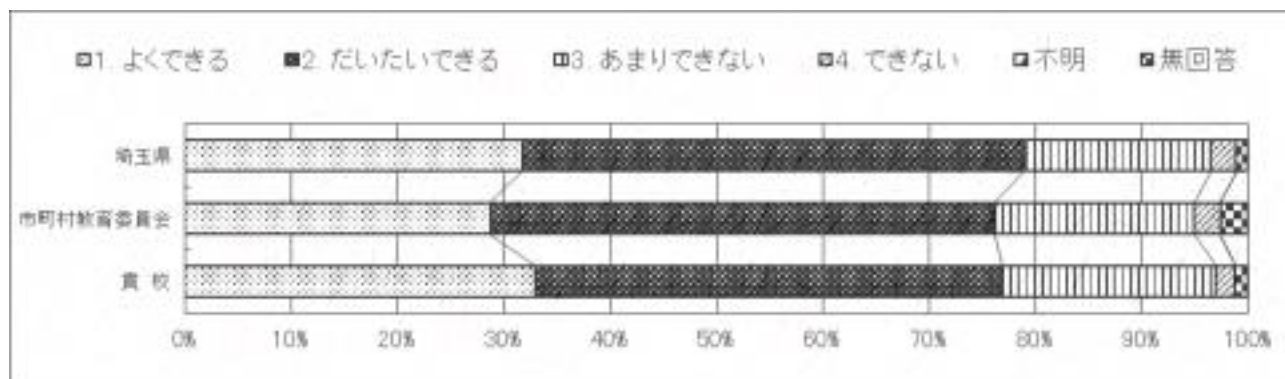
4 令和6年度の研究の歩み

(1) 生徒の実態

令和5年度埼玉県学力・学習状況調査の分析

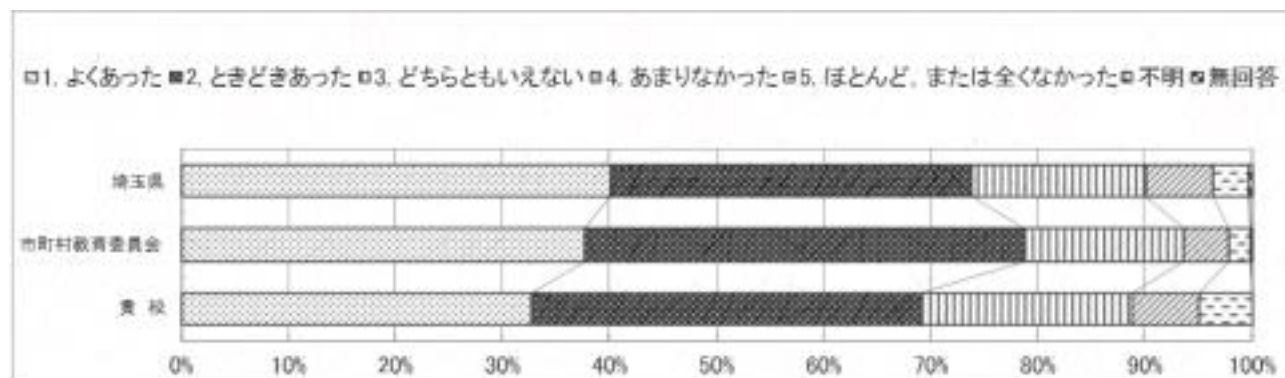
中学校1年生（現2年生）

先生の話や友達の発表をしっかりと聞き、自分の考えを伝えることができますか。



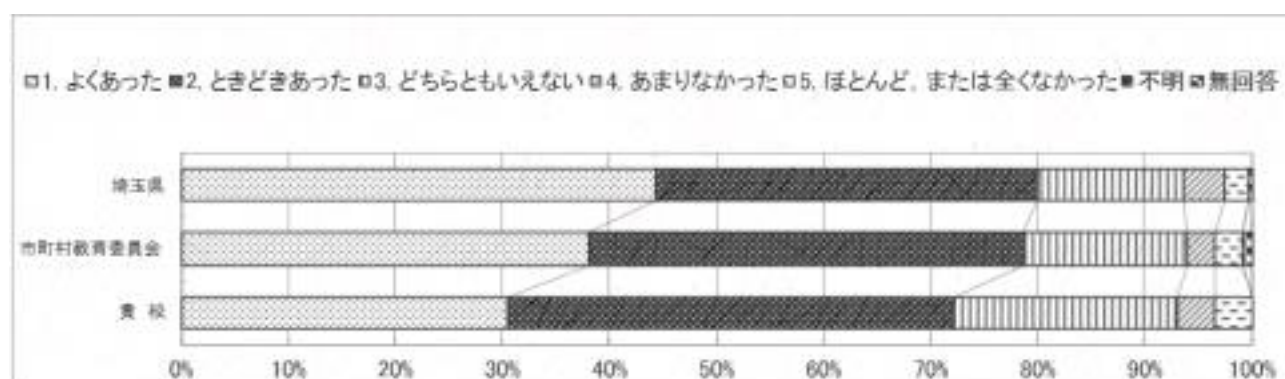
中学校2年生（現3年生）

課題の解決に向けて、話し合ったり交流したことで、自分の考えをしっかりともてるようになったことがありましたか。



中学校3年生（現高校1年生）

課題の解決に向けて、話し合ったり交流したことで、自分の考えをしっかりともてるようになったことがありましたか。



(2) 研究の理論

①コミュニケーション能力の定義

文部科学省の有識者会議においては、コミュニケーション能力について以下のように定義されている。

いろいろな価値観や背景をもつ人々による集団において、相互関係を深め、共感しながら、人間関係やチームワークを形成し、正解のない課題や経験したことのない問題について、対話をして情報を共有し、自ら深く考え、相互に考えを伝え、深め合いつつ、合意形成・課題解決する能力（初等中等教育局 教育課程課／国際教育課）

・AIによる非認知能力（コミュニケーション能力を含む）のルーブリック表

	5	4	3	2	1
主体性	安定して能動的に考え、責任を持って積極的に行動を継続的にできる。	能動的に考え、行動意欲を断続的に持続するが、頻繁ではない。	自分で物事を考え、他者に頼らず行動するが、その頻度は低い。	能動的に考える時とそうでない時があり、安定性が欠ける。	主体的に物事を考えることができていない。
問題解決能力	常に論理的に考え、本質的な問題を発見し、臨機応変かつ適切に課題解決に取り組むことができる。	論理的に思考して課題を発見し、トライ＆エラーを繰り返しながらも継続して解決に取り組むことができる。	断続的に論理的に思考し、課題解決に向けて改善策を模索し、行動を起こすことができる。	稀に特定の課題に対して論理的に考え、解決策を提案できるが、継続性や安定性に欠ける。	課題に対して論理的に思考できず、解決策を提案するための行動を起こせない。
批判的思考力	他者や自分の考えに対して常に先入観にとらわれず、論理的かつ俯瞰的な視点から物事を考えることができる。	先入観にとらわれることなく、安定して物事を多角的な視点から思考することができる。	断続的に物事を俯瞰的に捉え理解することができるが、安定していない。	稀に物事を複数の視点から思考できることがあるが、安定しておらず、継続的にクリティカルに考えることができない。	先入観にとらわれ、物事を俯瞰的な視点から考えることができない。
コミュニケーション力	常に他者の感情を理解・尊重しながら、自分の意見を適切なタイミングや方法で表現することが容易にできる。	安定して他者の感情を理解・尊重しながら、自分の意見を適切なタイミングや方法で表現することができる。	断続的にはあるものの、他者の感情を理解・尊重しようとしながら、自分の考えを表現することができる。	安定して他者の意見を理解したり、自分の意見を表現することができていない。	相手の感情を理解し、尊重しながら適切なタイミングで意思疎通することができていない。
協働力	常に積極的に異なる環境や立場にある他者と助け合い、尊重し合いながら目標や目的を達成できる。	異なる環境や立場にある他者と助け合い、尊重し合いながら目標や目的を達成できる。	ある特定の異なる環境や立場にある他者と断続的に協働し、目標や目的を達成することができる。	稀に異なる環境や立場にある他者と協働して目標や目的を達成しようとする意欲はあるが、頻度が低い。	異なる環境や立場にある複数の他者と互いに助け合い、尊重し合いながら目標や目的を達成できない。

これらの定義を活用しながら、生徒の育成したい力を職員間で設定し、どのようなことができれば達成に近づくのかについて、明確にした。

さらに、喜沢中学校職員1人1人に「ファシリテーションとはどのようなイメージですか？」と、アンケートをしたところ、以下のような内容が回答された。

1 生徒の自主性と主体性の促進させる役割

- ・生徒が自分で考え、意見を述べる機会を増やす。
- ・教師が話す時間を減らし、生徒が主体的に活動できる環境を作る。

2 コミュニケーションと協働の強化

- ・生徒間の対話を促進し、意見交換を活発にする。
- ・協働学習を通じて、他者の意見を尊重し、まとめる力を育てる。

3 問題解決能力の向上を促す人

- ・生徒が自分で問題を発見し、解決策を考えるプロセスをサポートする。
- ・ヒントや視点を提供しながら、生徒が自ら解決に導けるようにする。

4 多様な意見の尊重

- ・少数派の意見も取り入れ、全員が自由に発言できる雰囲気を作る。
- ・間違いを恐れずに意見を述べられる環境を整える。

5 リーダーシップと進行役のスキル

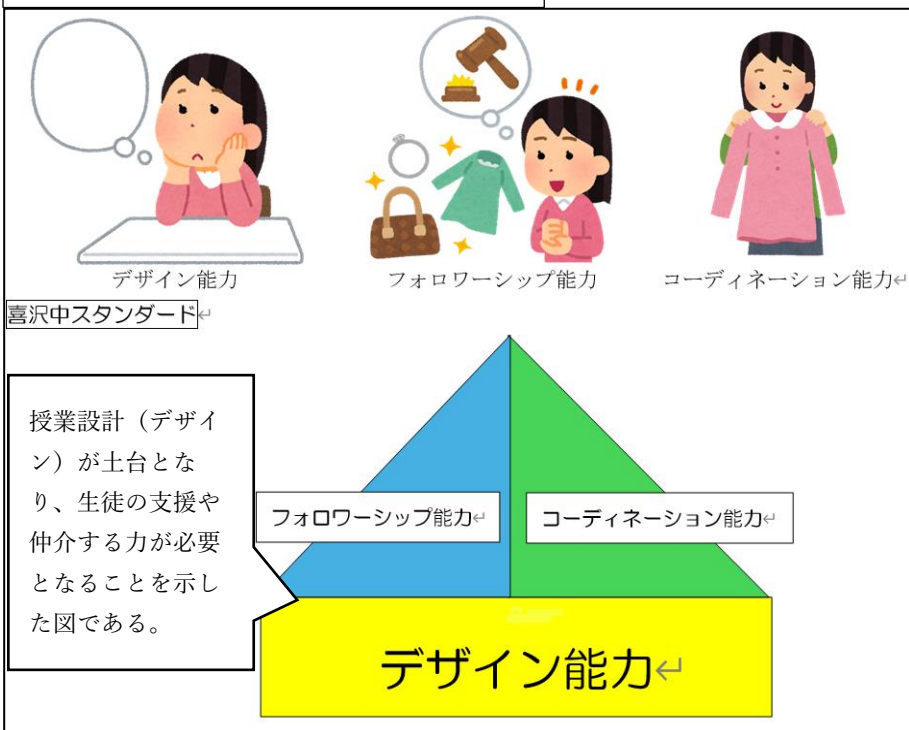
- ・教師が進行役としてリーダーシップを発揮し、スムーズな授業や会議の進行を行う。
- ・生徒が積極的に参加し、有益な結論に導けるようにする。

これらの意見をもとに、研修担当で話し合い、喜沢中ファシリテーション9つのポイント、9つのポイントのルーブリックを作成し、それぞれの教科の授業で実践した。

—喜沢スタンダードチェック項目（9のポイント）—

- | | |
|--|------------|
| ☐ 聴く・話すことの間を整えることができるか。 | (雰囲気作り／規律) |
| ☐ 見通しがあり、創造性の高い授業であるか。 | (導入／目的) |
| ☐ テーマの設定や、授業の仕込みに工夫が見られるか。 | (環境面／手法面) |
| ☐ 生徒の実態に沿った授業が展開されているか。 | (アドバイザー) |
| ☐ 生徒が主体的になり、生徒主役で授業が構成されているか。 | (進行役) |
| ☐ 生徒が正当に考えることのできる問題が提起されているか。 | (ティーチング) |
| ☐ 多様な意見や考え方を、否定せず考えを深めさせようとしているか。 | (司会力) |
| ☐ 支援をする場面と支援をしない場面を使い分けているか。 | (サポート能力) |
| ☐ ゴールに導く力。出た答えやゴールをさらに深めようとしているか。 | (調整能力) |

ファシリテーション技術のイメージ図



デザイン能力

1時間の授業のうちどのような授業構成をしているのか、場の設定や生徒が学びたくなるような工夫があるか。

フォローアップ能力

生徒の実態を把握し、生徒が主役となる授業が展開されているか。発問の正当性はどうか。支援に回るサポート能力があるか。

コーディネート能力

多様な意見をまとめる。支援する場としない場を使い分ける。出てきた意見に価値を見出そうとする能力があるか。

5 実践報告

①夏季研修を利用し、PBL に関する研修を校内で行った。

②各学年の主な授業実践

○1 学年

- ・総合的な学習の時間を活用し、「戸田市に貢献する」というテーマ設定の下、埼玉県住まいづくり協議会が主催する「よいまち大賞」に応募し、優秀賞を生徒が受賞した。(図 1)
- ・戸田型 PBL にて学習活動を実施した。全体の活動を通して、チームで協力し、話し合いを進め、計画を立案し調べ学習を行うことができた。学習活動を振り返って、グループの連携を意識し活動することで、チームワークの力がついたという成果が事後アンケートでみられた。

(図 2)

○2 学年

- ・「じゃんけんのグー・チョキ・パーにキューという新しい一手を加えて新しいゲームをつくりなさい」という課題をだし、グループで考え発表をするという活動を行った。答えのない問いに対して、新しいものを創造する力を養った。(図 3)
- ・職業をテーマに、働くとはどのようなことか、10年後の職業はどのようなになっているのかを学習した。また、3 days を通して働く楽しさや大変さを学んだ。この学習の最後に、「これからの社会に必要とされる職業やサービスを提案しよう」という、テーマで PBL を行った。

(研究発表)

○3 学年

- ・学年テーマを「9年間の義務教育から学んだ知識を誰かのために」と設定し、「働く人、高齢者、幼児、小学生、外国人、障がいのある方」をターゲットとして、この人たちの困りごとや不安をどのようにしたら解決できるかをグループで考えた。スライドで自分たちの提案や意見をまとめたり、ポスターや冊子、具体物を作成しわかりやすくまとめて、各クラスで相互評価しながら発表を行った。(図 4)

図 1



図 2

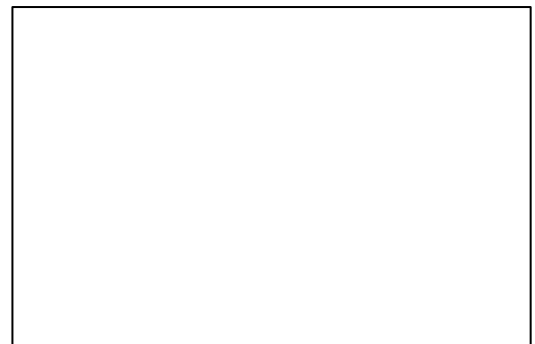


図 3



図 4

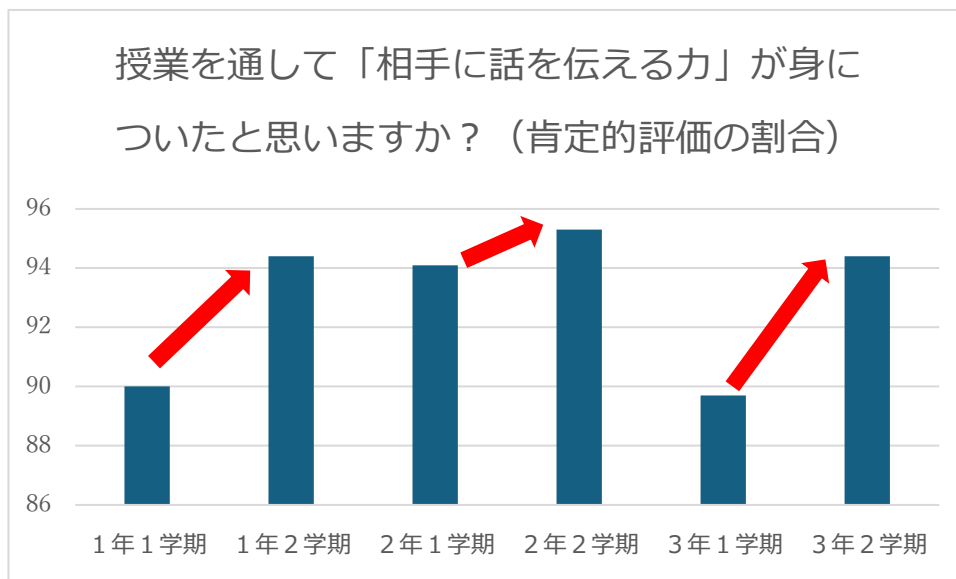


6 生徒、教員の変容と成果

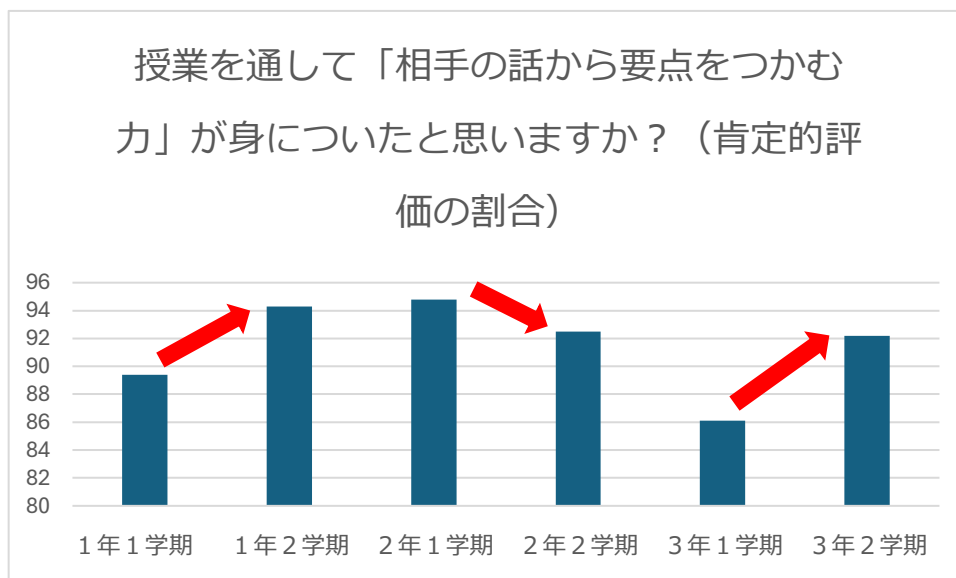
(1) 生徒アンケートの結果

1 学期末と 2 学期末に生徒アンケート（①～④の項目）を実施した。

① 授業を通して「相手に話を伝える力」が身についたと思いますか？



② 授業を通して「相手の話から要点をつかむ力」が身についたと思いますか？



③ ①②で回答した『身についた力』について、生徒自身が印象に残っている学習について触れながら具体的に記述させたところ、次ページのような回答となった。

コミュニケーション能力の向上

(以下の内容は生徒の意見をまとめたもの)

○相手に自分の考えを伝える力

(プレゼンテーション、議論、説明など、様々な場面で自分の考えを相手に伝える力が向上しました。)

○相手の話を聞き、理解する力

(他の人の意見に耳を傾け、その意図を理解する力が向上しました。)

○意見交換力

(自分の意見を述べるとともに相手の意見を尊重しより良い解決策を探る力が向上しました。)

○共感力

(相手の立場に立って考え、共感する力が向上しました。)

○非言語コミュニケーション

(表情や態度など、言葉以外のコミュニケーション能力も向上したと考えられます。)

思考力の向上

○問題解決能力 (様々な問題に対して、解決策を考え、実行に移す力が向上しました。)

○批判的思考力 (与えられた情報に対して、客観的に分析し、評価する力が向上しました。)

○創造力 (新しいアイデアを創出し、問題解決に活かす力が向上しました。)

○論理的思考力 (論理的に考え、自分の意見を根拠とともに説明する力が向上しました。)

- ④ これからの社会で生きていくために、今後身につけていきたいと思う力はあるか、理由とともに具体的に記述させたところ、以下のような回答となった。

コミュニケーション能力

○相手の話を聞き、理解する力

(相手の立場に立って考え、共感する力)

○自分の意見を相手に伝える力

(プレゼンテーション、議論、説明など、様々な場面で自分の考えを相手に伝える力)

思考力

○問題解決能力 (様々な問題に対して、解決策を考え、実行に移す力)

○批判的思考力 (与えられた情報に対して、客観的に分析し、評価する力)

(2) アンケート結果の分析

①②の回答で各学年のほとんどが1学期より2学期に伸びた割合が多い要因は以下の内容があげられると考える。

PBL の効果

- ・具体的な課題を設定し、グループで解決していく PBL 活動は、生徒の主体的な学習意欲を高め、様々な能力を総合的に育成するのに効果的であった。

多様な学習活動

- ・国語、数学、理科、社会、英語など、様々な教科の学習活動を通して、多角的な視点から物事を捉え、表現する力が養われた。

話し合い活動の重要性

- ・グループワークやディスカッションなど、話し合い活動を通して、自分の考えを整理し、相手に伝える力が養われた。

フィードバックの重要性

- ・他の生徒や教師からのフィードバックを通して、自分の考えを客観的に評価し、改善していく力が養われた。

また、アンケート結果から、以下の3点が重要だと考える。

アクティブラーニング

- ・生徒が主体的に学習活動に参加することで、知識の定着だけでなく、様々な能力が育成される。

コミュニケーション能力

- ・社会に出てからも必要とされるコミュニケーション能力を、学校教育の中で育成していく。

多様な学習活動

- ・一つの学習方法だけでなく、様々な学習方法を取り入れることで、より効果的な学習が実現できる。

さらに、④の回答で生徒がこれからの将来に「コミュニケーション能力」や「思考力」が必要だと感じている理由としては、「**社会に出てからも必要となる能力**」「**AI の発展により人間にしかない能力が求められる**ようになってくる」「**より良い人間関係を築きたいから**」「**自分の意見をしっかりと相手に伝えたいから**」などがあげられた。

これより、生徒たちは、**社会に出てからも必要となる能力**を意識していること、**コミュニケーション能力の重要性**を認識していること、**AI の発展による社会の変化に対応したい**と考えていること、**主体的に学習に取り組もうとする意欲**があることなどがわかった。

(3) まとめ

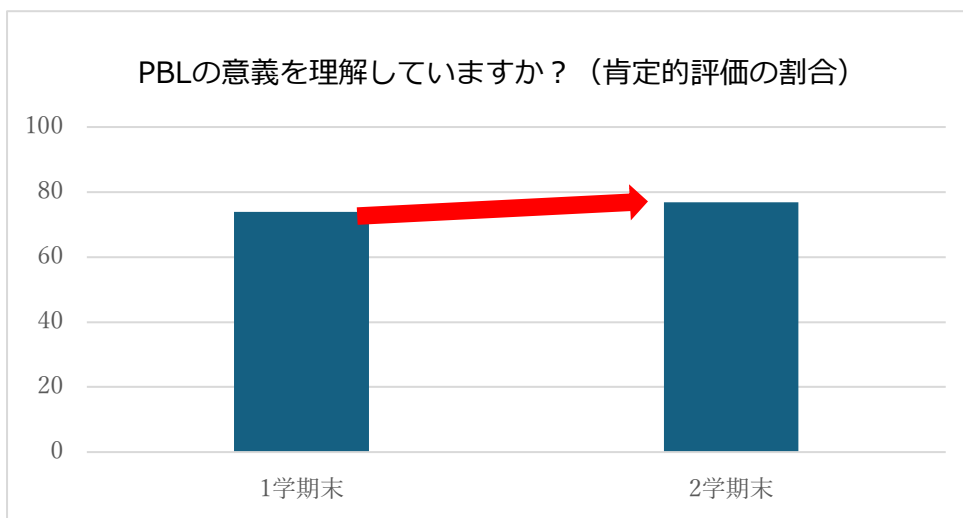
今回の分析結果から、学校での学習活動が生徒のコミュニケーション能力や思考力の向上に大きく貢献していることがわかった。今後も、生徒の成長を支援するため、様々な角度からの分析と改善を続けていくことが重要と考える。また、生徒はこれからの社会で必要となる能力を意識し、積極的に学習に取り組もうとしている様子が見られた。生徒たちの意欲を引き出し、それぞれの個性に合わせた指導を行うことで、生徒の成長をサポートしていくことが大切だと改めて感じた。

(4) 教職員アンケートの結果と分析

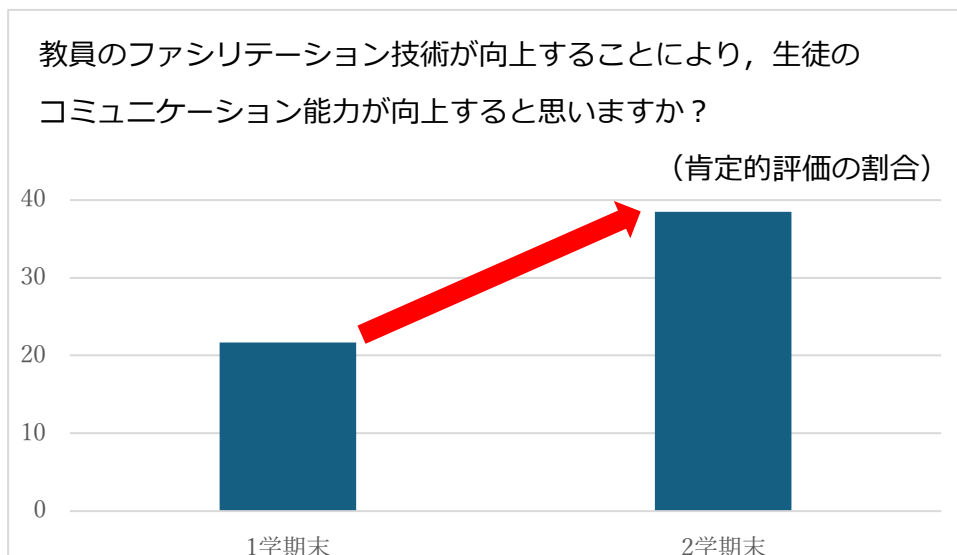
教師のファシリテーション技術の向上に関するアンケートを研修の中で実施した。

(1学期末、2学期末実施)

・PBLの意義を理解していますか？



・教員のファシリテーション技術が向上することにより、生徒のコミュニケーション能力が向上すると思いますか？



また、教職員の記述を分析し、教師のファシリテーション技術の向上のために重要であるポイントを、以下の9つにまとめた。

1.主体性の育成

生徒が自ら考え、学び、問題を解決する力を育てることが重視されているため、教師は生徒の自主性を尊重し、主体的な学びを促進する役割を担わなければならない。

2.コミュニケーション能力の向上

生徒間の対話や協力を通じて、コミュニケーション能力を高めることが重要されるため、話し合い活動やグループワークを通じて、生徒が意見を交換しやすい環境を作ることが求められている。

3.ファシリテーション技術の向上

教師自身のファシリテーション技術を向上させることが必要とされている。授業計画の段階からルーブリックを活用し、授業後の振り返りを通じて授業改善を図るべきである。

4.調整力と環境づくり

生徒が自分の考えを言いやすい環境を作るための調整力が重要である。教師は、生徒が自由に発言し、意見を述べられる雰囲気を作ることが求められている。

5.広い視野と自己成長

教師が広い視野で生徒と関わり、自分自身の成長にもつなげることが重要である。ファシリテーションを通じて、教師自身も成長し続ける姿勢が求められる。

6.授業規律と主体性のバランス

授業規律を保ちながら、生徒の主体性を育てることが重要である。教師は、生徒の主体性とわがまを区別し、適切に指導することが求められる。

7.具体的な実践方法の共有

他教科の授業から具体的な実践方法を学び、積極的に取り入れることが重要である。ファシリテーションの技術を他の教師と共有し、実践する機会を増やすことが求められる。

8.言語化と整理:

日々の指導を言語化し、整理することで、授業デザインの力を広げることができる。誰でも理解できる言葉で説明することが重要である。

9.タイムマネジメントとバランス:

生徒を自由にさせるだけでなく、タイムマネジメントと教師主体の授業進行のバランスを取ることが必要であり、生徒の主体的な学びを支援するための適切な管理が求められる。

これらのポイントを通じて、教師は生徒の主体性を育て、コミュニケーション能力を高め、効果的なファシリテーションを実現することを目指すべきだと改めて認識することができた。

7 まとめ

<研究の成果と課題>

- ・① 聞き手側を意識した伝える力／② 相手の話、要望の論点をつかむ力 の2点を向上させるための取組を行った。これらを示す、県学力調査の質問項目である「課題の解決に向けて、話し合ったり交流したりしたことで、自分の考えをしっかりとるようになった」という質問に対して、69.1%から72.6%へ伸ばすことができた。
- ・教師がファシリテーションを意識することで、生徒のコミュニケーションが活発になり、総合的な学習の時間のみならず各教科の授業で生徒同士の対話が増え、生徒の学びが充実してきた。
- ・コミュニケーション能力＝非認知能力の育成は、定義がなければならないと考え、文部科学省のコミュニケーションの定義・生成AIから非認知能力のルーブリックを参照し、伸ばすべき生徒の姿を教職員が認識することができた。
- ・先行研究である「疑・思・創」のサイクルを回すことで、生徒の思考力が深まり「だれを対象にしているのか・その職業やサービスができると何が良いのか・本当にだれかのためになっているのか・その職業やサービスができることで困る人はいないのか・それは本当に実現可能なのか」など、相手への質問を考えることにより批判的思考力が身についた。

<ファシリテーション、教員が意識した視点や取組・校内研修・県市教育委員会学校訪問を経て>

- ・喜沢中独自のファシリテーション技術の9つのポイントを作成することができた。
- ・校内研修や課題研修を重ね教員のファシリテーション技術に関する考え方や意識が変化した。
- ・研究授業でファシリテーションを意識する中で、生徒同士の話をつなげる、深めるやりとりをすることができなかった。話し過ぎず個別（班や一人一人）への声かけが必要だと理解した。

<総合的な学習の時間のPBL（外部との連携）について>

- ・PBLに関して課題設定が大切だと感じた。大人が介入しなければ解決しない課題を設定するのではなく、生徒が解決できる難易度の課題を設定した方が授業時数的にはよいと考えた。
- ・目標に達しやすい内容を教員側があらかじめ選定したほうが、スムーズに授業を進行することができると思われた。
- ・いずれの学年も生徒のPBLへの意識は高かった。外部との連携を踏まえた活動を実践したことで、生徒たちの深い学びにつながったと感じた。そのため、PBLは「失敗をおそれない勇気を生徒と教師がもつべき」だと感じた。「失敗をさせたくない」という教員の意識が強すぎるとは、活動している生徒が納得感や充実感を得ることが難しいまま時間が過ぎてしまう授業になる可能性があると考えた。また、外部と連携したPBLでは、生徒が直接連絡を取ることが相手方に失礼にあたる可能性や取引先へ多大なる迷惑をかけてしまう場合がある。そのため、教職員が生徒と外部機関との間に入り、生徒の活動状況を把握するなどアンテナを張ること、教員側もフィールドを広げ外部と積極的に関わらなければ成立しないと考えられる。今後も年間での他の活動とPBLの活動時間の計画や、教員のPBLに対する意識をより学校全体で深めていきたい。